議会だより

議員研修視察を終って

去る七月八、九、十の三日間にわたり、議会議員の研修旅行が行なわれたが、従来、この種の旅行には免角誤解を生じ易く、研修に名を借りた公費の慰安旅行ではないかとの憶測も流れたこともあったが、これは研修の内容が伝えられぬままに招いた誤解であったと思われる。

今後、この種の視察研修にあたっては、その視察研修の概要を報告し、単に参加した議員のみに止まらず、広く村民の人達共々、本村の将来に与える示唆ともなれば幸いと考えるものである。

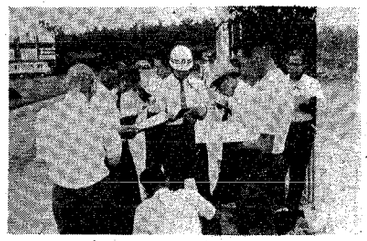
今回の研修の目的は、高度成長下にある表日本の表情、とりわけ首都圏に近接する静岡地方の状況や、東名高速道路の開通に伴なうインターチェンジの状況視察であった。

八日、七時四十二分、東三条発の上野行急行に乗車、東京を経て午後二時十二分、新幹線浜松駅に到着し、車を駆って二時四十分に浜名湖畔舘山寺町に致着した。

この附近には戦時中航空隊のあった所で浜松市の人口は四十二万余、静岡市より大きいとのことである。車窓より見た農村地帯の様子は気候の良い東海地方にもかかわらず、ビニールハウスが至る所に見られる反面、雑草の生え茂った休耕田も点在し、生産調整下にある農村の苦脳ぶりを見せつけていた。

折から台風通過後の浜名湖は水も濁り、どんよりと鉛色の雲がたれ下がっていて湖上を吹く風も何となくうす寒さを思わせるような気候であったが、さすがに観光地に相応して四、五階建ての旅館建設工事があちこちに見られた。

翌九日は浜松駅より乗車、十時十七分静岡駅に致着、定期バスにのり、今回の視察目的の一つである登呂遺跡を見学した。この登呂遺跡は特別史跡に指定されており約二千年前の古代人の住居跡である。


沼津で所長より説明をきく一行

復元された家屋は外柵で長経十米、短経九米の小判形で面積は約七十二平方米（約二十二坪）、床面は長経六、三六米、短経五、七六米で、棟までの高さは約四、五五米（十五尺）、柱は四本で二、七三米と二、二七米の間隔に堀立柱とし、柱の沈むのを防ぐため、三十センチ角の厚板が敷かれ柱の上には桁と梁をかけて骨組みとし、屋根の棰尻は周囲の土手にふき下ろされていて、言わば半地下式の構造で、五、六人の家族が住居していたと推定され、屋内はひんやりとした涼しい感じであった。屋根はもちろんカヤ葺きである。

沼津インターチェンジの一部

又、その周囲には西暦一世紀ごろの弥生式時代の農耕文化の遺跡があり、水田の遺跡としては世界最大のものであるとの説明であった。

途中、清水次郎長一家の墓を見学、フジヤマの見える港として外国船に人気のある清水港を見て廻った。折から入港中の外国船も数隻停泊していた。ここは輸入木材の集積地でもあり、附近にベニヤ板の加工場が多い所である。

アルミの原料ボーキサイドの野天積の山も見られ、港内には造船所もあり行き来する大小の発動機船でまるで港内ラッシュ、港内の活発な動きはとても新潟港の比ではない。

高度成長下の表日本の躍動ぶりを目のあたりに見て、裏日本の新潟地方と比較していかに地域差が大きいかを痛感させられた。

港内見学を終って平地では日本一の景勝地と言われる日本平、天女の舞いで知られる三保の松原を見て宿泊地修善寺に致着した。

翌十日は八時に旅館を出て、三島を経て、今回の最後の目的地である東名高速道路、沼津インターチェンジの現地に致着した。

本郡にも近く北陸自動車道の建設が予定され、又、大規模農道も着々その建設準備が進められ、ハイウェー時代が実現したときに、この附近はどのように変貌するか、又、どのような条件におかれるかを考えて先進地の実態を見るということが今回の最大の目的であった。

沼津インターチェンジに致着すると間もなく、あらかじめ連絡してあった通り、日本道路公団御殿場道路維持事務所の相沢所長が車で出迎えられ、詳細の説明をきいた。この事務所の管内は沼津から御殿場を中心に大井松田まで延長四十五、八キロでインターチェンジが三ケ所ある。

この東名高速道路は東京都世田谷区の環状八号線の交叉点から愛知県小牧のインターチェンジまで三四六、四キロ、総工費三、四二五億を要した。（一キロ当り約十億円）道路巾は二五、四米、中央に四、五米の分離帯が設けられ上り下りで四車線である。（東京から厚木までは六車線、巾員二二、六米）この沼津インターチェンジはトランペット型と称されるもので、面積八万五千平方米であるが最も小型であり、同じトランペット型でも大井松田は十二万七千平方米という。

登呂遺跡二千年前の住居（復元家屋）

又、その他、サービスエリア、パーキング、バストップあるいは道路状況の通報網や気象状況の観測、照明、監視体制、消火設備等完璧と言える程整備されていると見受けられた。

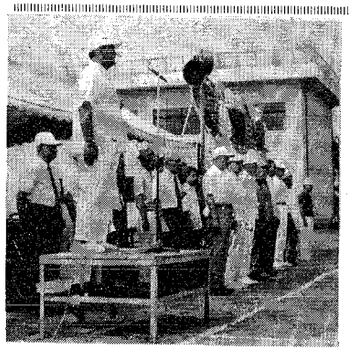
又、インターチェンジが設置される影響もその地域の特性もあり企業の林立した所、観光開発の進んだ所など多様であるという。

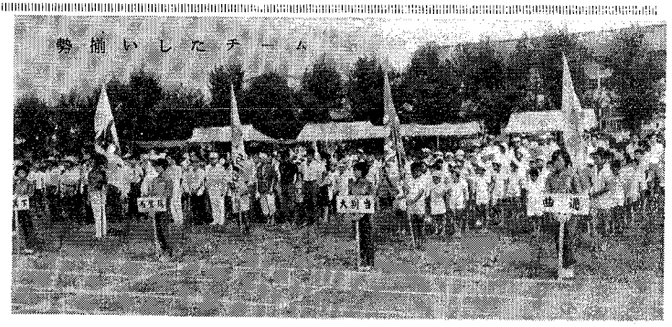
先進地の実態を目のあたりに見て本村の現在の環境をどのように生かすかが重要な問題である。

沼津からは国鉄バスで約二時間で東京に致着、途中一人の事故もなく終了したのは何よりであった。

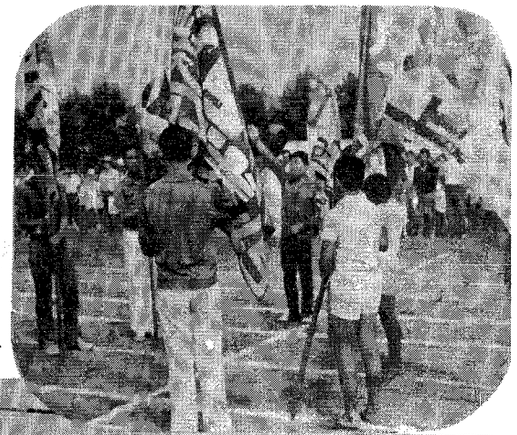
この研修報告が今後、村民一人一人の心の準備の一助となれば幸いである。（文責細海）

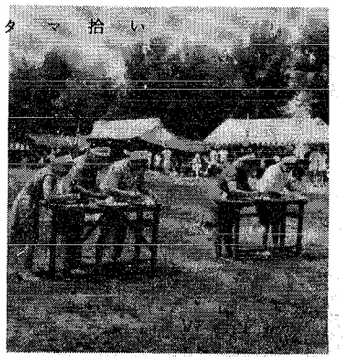
村民運動会スナップ


開会あいさつ


勢揃いしたチーム

アベック2人3脚


選手宣誓→


タマ拾い

俵送リレー

ジュース飲み競争